

「千の扉」

柴崎友香

大人の小説だ。あざとい台詞や比喩には頼らない。奇抜な人物も出てこない。にもかかわらず、世界の土台からむくむくと漏れ出してくるような説得力がある。繊細な筆致の濁りのなさに、かえってゴチツとする抵抗感があって、ひやっとすることもある。それでいて、読んでいくうちにうつつすらと晴れ間が見えて目がほぐされ、得も言われぬおだやかな気分になる。こんなブレンドを実現できるのはこの作家しかない。

『千の扉』は団地小説である。団地小説と言えば、古井由吉をはじめ数多くの書き手が試みてきたジャンルで、ゴシック風味など含め先人の影響も感じられる。しかし、いかにも柴崎友香の持ち味と言えそうなのは、物語を

「心が遠かったり」することはあっても、積極的に介入したり、ぎらぎらと汗をかいたりすることがないように見える。

そういう傾向は小説の語りそのものにもある。たとえば第3章の冒頭部。

窓際の席がよかった。
千歳はパーテーションの陰から、職場を確かめた。

二週間前から勤めだした機械部品の会社は、高田馬場駅に近いビルルの三階と四階に入っている。千歳に与えられた場所は、細長いフロアの窓からいちばん離れた隅、コピー機とシュレッダーに挟まれた狭いデスクで、前任者が使っていた、柴犬の写真入りの小さなカレンダーが置かれていた。

フォーカスの順番がちよつとずれている。はじめに「心の声」を出し、それから人物の視点が明確に、と。こういうやり方で効果を生むのは珍しくないが、柴崎の場合、それがどっつきり感や風雲急などに結びつくのではなくて、どことなく散逸感がある。しかもそこに描かれるのは、灰色で、単調で、無機的な、およそ派手さのないオフィスの風景なのである。

魅惑の団地小説

阿部公彦



中央公論新社 1600円+税

ぶいっと裏切りつつ、しつかり支配下におさめてしまおうとこだ。

何よりおもしろいのは、主人公が主人公面しないことである。主人公だけではない。そもそも出てくる人物たちがみな、舞台の上に引つ張り出されているというのに、静かで、無頓着で、無表情で、いつの間にかいなくなったり、いつの間にか死んでいたりする。「あたしは登場人物だぞー」と腹式呼吸で声を出したりしないのである。

この小説の表の主人公は千歳。裏の主人公は千歳の夫の祖父勝男である。だが、その勝男の最期はほんとうに静かなもので、まるで電池が切れたみたいにな死に方である。

朝、千歳に持たされたりんごを抱えた

作品中の場所はどこも、およそ活気がない。

空き地とか、閑散とした街角とか、「カトレア」などという名前の喫茶店。その中心に君臨しているのが、もはや高齢者しか住まなくなつた築何十年という巨大な団地なのである。

そう聞くと「ああ、よくある荒涼とした都市風景ね」と思うかもしれない。たしかにそうだ。風化した東京の疲弊ぶりがとらえられている。しかし、この作品が描きたいのは、たぶんぎりぎり、それと違うものだ。そして、このぎりぎりが何と大きな違いをもたらすことか。おかげで、この作品には何と豊かな世界が満ち溢れることか。

「千の扉」とは団地にならぶ無数の扉のことである。新婚の千歳は夫の一俊とともに、もともと彼の祖父母が住んでいたこの団地の部屋を引き継いで住むことになる。そんな千歳に対し、団地の一つ一つの扉がさまざまな物語を垣間見せる。中でも中心となるのが、一俊の——実は血のつながりのないことが後でわかる——祖父の勝男である。すでに高齢になつた勝男に、戦後すぐの頃、「運命の人」がいた。その「運命の人」の痕跡を、団地に住む「高橋」（何というふうの名前！）という人物が保持しているらしい。その高橋さ

一俊が部屋に入ると、勝男は布団を被って眠っているように見えた。話しかけてもなんの反応もないので、顔を覗き込み、その肌の色があまりにも白いことによく気づいた。

うっかりすると読み飛ばしそうな場面だ。りんごのことしか頭に残らないかもしれない。泣いたり騒いだりしない。千歳にしても勝男にしても、みんな人生でそれなりにいろいろあるのだが、彼らは世界に対しほとんど他人事のように対応する。よく分かっているのか、冷めているのか、あるいは別の理由があるのか、心理の動きは「気になる」とか「なぜだか」というふうに一枚膜の挟まったような鈍いもので、そのせいで「不用意」だった

んのおとを千歳が追う。

しかし、千歳は必死に探偵したりはしない。あくまで静かに、無表情に、高橋さんを探し、ときどきふと気づいたりするだけ。ところが、そのうちに団地がほかにもいろいろな扉を開けてくれる。夫の一俊の過去、一俊の親友、親友の妹、一俊の母、母の同級生、母の恋人、見知らぬ女の子、ご近所さん……。そしてついに夫の一俊や、千歳自身にも、まだ開けられていない扉があるのがわかる。ほかならぬ千歳の扉が唐突に開くときの感動は、まさに柴崎節全開である。私たち読者はそこでようやく、作家に首根っこをつかまれていたことに気づく。

千歳という名前はいかにも象徴的である。だが、おそらく彼女は自分が主人公であることに気づいていないし、主人公となるつもりもない。しかも千歳のまわりには、千歳と同じくらいの人物的質量、をたたえた人たちが惑星のようにゆるゆると浮かんでいて、奇跡的にバランスをとっている。ぎりぎり荒涼ではない、そのぎりぎりのところにとんでもなく「リアル」で血の通つた世界があるとは、こんなふうな「リアル」を浮かび上げさせることができる。